

ビッガー・トーマス (I)

——リチャード・ライトと人種関係——

安部 大成

まえがき

- 1 ビッガー・トーマスの特徴とその構築過程
- 2 ビッガー・トーマス
 - a. メアリー・ドルトンの死まで …… (以上本号)

まえがき

リチャード・ライトは彼と同時代のアメリカ黒人を『アメリカの息子』(以下、『息子』)の主要人物であるビッガー・トーマス及び『ビッガーはどの様にして生まれたか』(以下、『ビッガー』)で述べている No.1 から No.5 までのビッガーと、これらよりも穏便なタイプ (mild type)¹⁾、つまりビッガー・トーマス型の変種 (the variations in Bigger Thomas patterns)²⁾に二分して見ている。

『息子』のビッガーは『ビッガー』のナンバー付きのそれが南部・農村型であるのに対して、北部・都会型であって、人種差別形態の相違もさることながら、大都会という環境が人の欲求充足の可能性をそそるので、この型に属するビッガー達の外界への反応は凄まじい³⁾、と、その違いを指摘している。

ライトは『息子』で、白人弁護士マックスに、ビッガー・トーマスを1200万倍すればいい、それでアメリカの全黒人になり、これで一国家が形成される⁴⁾、と言わしめており、——このように、素朴に、大袈裟に言ったのは、

黒人を差別して止まない白人社会を脅かしてやろう、という意図があるからだろうが、——また、

「……私が見て、感じた通りのビッグーを書かなかっただら、……ビッグー自身がやったように私も反応しただらう。」⁵⁾

と真剣に述べるのを考えに入れると、ビッグーをアメリカ黒人の原型と見ていたのであらう。この『息子』の主要人物達の行動、ものの見方、感じ方を検討しながら、ライトの人種関係に関する、基本的な見方をとらえたい、と考える。

さて、ライトが、黒人の原型として構築した(1)ビッグー・トーマスの特徴とその構築過程を検討しながら、先ず、ライトの黒人に対する見方を探っていくことにする。

1 ビッグー・トーマスの特徴と その構築過程

『ビッグー』に掲げられている No.1 から No.5 までのビッグーの行動の特徴を掲げると次のように要約されよう。

ビッグー

No.1 ……気まぐれで、乱暴な子供で、仲間を脅かし、痛めつけ、ものを奪い取り、あるいは屈服させ、鬱憤晴らしをする。

No.2 ……白人の店で、付けでものを買って、踏み倒し、家賃も払わない。勿論、払う金もない。何もかも白人が所有していて、黒人には何もないのだから、そんなものは払わなくていい、と言う。他の黒人達は、それをしたくてもできないが、彼は思い通りに日暮

らしして、今は刑務所に入っている。

No. 3 ……黒人社会の無法者で、映画館の入場券の代りに劇場係の腕をひねって、無賃で入場する。経営主は、いずれ奴を殺してやる、と激怒するだけのことで、手のつけようがない。彼はどこでも我がもの顔に振るまい、禁酒法の時期、密造酒の運び屋をやっている、白人警官に射殺される。

No. 4 ……反逆的な性分で、南部の人種隔離法をあざ笑い、罵倒し、踏みこむ。精神状態は躁か鬱かのどちらかで、いつもいづれかに揺れ動いている。人種差別のしきたりを出し抜いては喜び、決して自由になり得ないことに思い及んでは悲嘆にくれる。本を読んでは、冷やかすように、物欲し気に、皮肉って、白人のまねをして、おどけて見せるが、結局、白人は何もさせてはくれぬ、と気落ちした様子で言う。彼は精神病院送りになる。

No. 5 ……気が向くと、家賃も払わないで隔離された市電に乗り、好きなところに席を取る。白人席だから退けろ、と白人車掌に注意されると、無造作にナイフを取りだし、退かしてみろ、と脅かす。白人達はかまうと危ないので、放って置く。電車は事も無げに運行され、黒人客達はつかの間の強い満足感を味わう。彼の末路は想像に難くない⁶⁾。

ライトが白人の抑圧下にある黒人の振舞いを観察し、その特徴をもとに上記の五つのタイプに分類した。ビッガー・トーマスという名のもとにこれをまとめたのは、出版された『息子』(1940)が大変な反響を呼び、その主要人物が、抑圧的な白人社会に、強い反感を持ち、これを行動で表すタイプの黒人を象徴する人物として注目されたからそうしたのであろう。

ライトが言うには、南部の人種隔離法を破って行動したのは、これらビッガー・トーマス達だけであって、結局は

「彼等は撃たれ、吊され、手や足を切り取られ、リンチ殺害され、また大抵の場合は、死ぬか、氣力が打ち砕かれるまで、追われる身となるのであった。」⁷⁾

彼は彼等に敬意を表しているかと言えば、そうではない。これから掲げるビッガー・トーマスの変種型、と彼が呼ぶ黒人達よりも、どちらか、と問われれば、反逆するビッガー達に共感を覚える、ということのようだ。だから、つきつめていくと、変種型は嫌いであり、従って、これに属する一般の黒人は嫌いで、さらにつきつめると、ビッガー達も嫌いである、ということ、つまり、黒人は皆嫌いだ、というところに到達するが、これは後の項目で検討することになる。

では、変種型を要約するが、これにはナンバーは付されてない。しかし、都合よく5種類に分けられるので番号を付すが、ビッガーのそれに照応するものではない。

変種型

1. ……信仰に生き、この世の苦勞は信心の深さによって、来世で報われるもの、とする。
2. ……南北戦争直後、開花した解放の一時期に、未だ望みをつなぎ、権利の獲得に幾多の戦略をこころずる。
3. ……傷心の思いと憧れとをブルース、ジャズやスイングに表現し、心の糧にしようと試みる。
4. ……炎天下で労働し、うずく欲求といらだちとを酒をあおって鎮め、慰めともする。
5. ……教育を受けるべく奮闘し、得た教育のお陰で、抑圧する側の白人ブルジョアジー流に、利益を享受する。大抵の場合、白人権力と協調して、苦悩にあえぐ仲間達を抑え込み、自らを「指導者」と称する⁸⁾。

これらの変種型は、ビッガーと同じく、白人社会に対して、強い反感と反逆心を、一度は抱いたものの、生計を営む必要上、それを捨てるか、和らげて、穏やかに暮らしていく道を、止むを得ず、選んだ人々なのである。

ライトは南部で生まれ育った17年の間、ビッガー型以外の黒人が圧倒してくる白人に反抗するのを見聞きしたことがない⁹⁾、と言う。

ビッガーの変種型を生む原因は、ライトがその親族と共に体験したのであろうが、

「私達は南部黒人であり、腹をへらしていたが、生きていきたくかった。いや、それ以上に、敢えて争いごとを起こすよりも、ひもじい思いに耐えている方がよかった。」⁹⁾

からだと言う。

では、ビッガー・トーマス型の黒人を生む原因は何か。まず、彼は地上で最も豊かな国の

「外された社会の所産であり、所有するものがなく、受け継ぐ資産のない人間」¹⁰⁾

である。これだけであれば、ただ、豊かな社会から締め出されて、貧しく暮らす黒人の一員にすぎない。

ビッガーのビッガーたる所以は、彼等黒人を締め出すところの白人社会に対する彼の反応の仕方にある。彼は彼がそこに生きて目にする

文A 「アメリカの生活場面に強く心を引き付けられた上、これにはねつけられた」¹¹⁾のだ。

さて、「アメリカの生活場面に強く心を引き付けられた上、これにはねつけられた」というビッグーの心の状態を正確に知る必要がある。

「アメリカの生活場面」とは「アメリカ社会」のことであり、また「外された社会」とは、人種隔離、あるいは人種差別によって、アメリカ社会から離間させられた「黒人社会」を言うのであるから、「アメリカ社会」はそこから「黒人社会」を外した「アメリカ白人社会」を意味することは明白である。そこで文 A を、よりはっきり言えば、ビッグーは

文 A' 「アメリカ白人社会に強く心を引き付けられた上、これにはねつけられた」ことになる。

そこでビッグーは彼を「はねつけ」た「白人社会」にどのような反応をするのであろうか。ここが肝心なのだ。ライトはこれに続けて言う。

文 B 「彼はアメリカ⁽¹⁾生まれの息子だから、アメリカ人⁽²⁾なのである。しかし、また同時に、彼は、漠然とした意味で、黒人民族主義者 (a nationalist) なのである。と言うのは、彼はアメリカ人⁽³⁾として生きることを許されないからだ。」⁽¹²⁾(下線番号・波線=筆者)

上記の文 B は文 A (文 A') を説明するものである。そして、そこに「また同時に、彼は、漠然とした意味で、黒人民族主義者なのである。」という文が挿入されていることに気づく。これが、どんな役割を果たしているかを明確にするために、文を分析することにする。

「彼がアメリカ生まれの息子」だから、「アメリカ人なのである。」という部分は、彼が「アメリカの生活場面に」(「アメリカ白人社会に」)「強く心を引き付けられた」のは当然のことだ、とその正当性を説明する。

「アメリカ人として生きることを許されない」という部分は「これ」即ち

「アメリカの生活場面」(「アメリカ白人社会」)に「はねつけられた」という事実の説明であると同時に、挿入文の原因あるいは理由を述べたものである。

従って、この挿入文は、ビッグが「アメリカ白人社会に、強く心を引き付けられた上、はねつけられた」ことに対する反応をいうことになる。

この反応の内容を明らかにすれば、ビッグが、白人社会と黒人社会、白人と黒人、そして黒人である自分自身に対してどのように反応しているかが分かる。そこから、そのような反応の原因となるビッグの欲求、望み、願望が何かを探り出すことができる。

そのためにも、文B中にある「アメリカ人」という言葉の意味を明確にする必要がある。

ライトは文Aで「アメリカ」という言葉を曖昧に使ったように、この「アメリカ人」も意味が不明瞭である。その意味をはっきりさせよう。

下線(3)の「アメリカ人」……

これはビッグが黒人であることを忘れずにいけば、直ぐ分かる。「アメリカの生活場面」が「アメリカ白人の生活場面」であり、「アメリカ白人社会」であるように、明らかに「アメリカ白人」を意味する。

下線(2)の「アメリカ人」……

これは下線(3)を包み込むところの枠の大きいもので、アメリカ市民権を持つ者を言う。これは様々な人種・民族・出身国系の人々を包括する。下線(1)の「アメリカ」はこれらの人々から成る国家を言う。

問題はライトが、彼自身が黒人として体験した人種抑圧とアメリカ社会との関係を、ビッグを通じて述べる時、何故、明らかに意味の異なる「アメリカ人」という言葉を、意味の違いを明示せずに、曖昧にしたまま使うのか。

ここでラングストン・ヒューズが、黒人の強い心的傾向の一つとして、黒人であることを嫌って、白人になりたい、というかなわぬ願いを抱く傾向

を取り上げ批判した評論、『黒人芸術家の前に立ちはだかる人種という山』(1926)を想起したい。

「将来を最も約束された若い黒人詩人の一人が、私に次のように言ったことがある。『私は黒人詩人ではなくて、詩人になりたいのです。』これは確か『私は白人の詩人のように詩を書きたい。』という意味だと思う。無意識のうちに、『白人詩人になりたい。』という意味であって、その背後には『私は白人になりたい。』という意味がきっとあると思う。……精神的に自分の属する人種集団から逃げたいという願望があるようでは、この青年はたいした詩人になれるかどうか疑わしい。だが、これはアメリカで黒人が本当に詩人になれるかどうかの道程に立ちはだかる山である。」¹³⁾

ヒューズは白人中産階級的生活様式を理想の基準とし、白人志向を強め、黒人大衆及びその文化から離れようとする黒人のインテリや専門職グループ、中産階級を批判、黒人文化に生き、黒人である自己を恥ずかしがったりしない、自己充足した黒人大衆の生き方に、根をおろした芸術家の出ることを求めた。

黒人であるのに黒人を嫌い、白人になりたい、というこの心的傾向を黒人嫌悪・白人憧憬と呼ぼう。こんな願いを内心抱いているようでは、優れた黒人芸術家にはなれない、とヒューズは言う。

優れた芸術家になる、ならぬは別として、黒人嫌悪・白人憧憬は黒人解放の道程に立ちはだかる、大きな山であることは間違いない。

さて、ライトが「アメリカ人」という言葉を曖昧にしていたまま使っている点を念頭に置いておいて、文Bの下線部分(1), (2), (3)の含意をつかんで言い換えると、次の三つの文ができる。

文B' 「彼はアメリカ合衆国生まれの息子だから、アメリカ市民である。

しかし、また同時に、彼は、漠然とした意味で、黒人民族主義者なのである。と言うのは、彼が黒人であるがために、アメリカ白人として生きることを許されないからだ。」

文 B⁷ 「彼はアメリカ合衆国生まれの息子だから、アメリカ市民である。しかし、また同時に、彼は、漠然とした意味で、黒人民族主義者なのである。と言うのは、彼が黒人であるがために、アメリカ白人が一緒には生活させてくれないからだ。」

文 B⁸ 「彼はアメリカ合衆国生まれの息子だから、アメリカ市民である。しかし、また同時に、彼は、漠然とした意味で、黒人民族主義者なのである。と言うのは、彼が黒人であるがために、アメリカ市民として、白人と平等な生活をさせてもらえないからだ。」

さて、次に、文 B の波線部が、このままでは意味が不明瞭であるから、検討してみたい。

ライトはビッガーの社会意識には二つの面がある、と言う。

「ビッガーの社会意識のこの二面のうち、民族主義的な面を第一に据えた。それはビッガーの白人に対する非常に激しい憎悪と私の感情が一致するからではなくて、彼の憎悪が彼を……彼を最も象徴的で、説明し易い位置に据えてしまったからである。……私はビッガーのもつれ、困惑した民族主義感情に、私のよく自覚した、事情に通じた民族主義感情をもって、アプローチしようと試みてみた。だが、ビッガーは黒人の宗教や民衆文化を必要とする程の民族主義者でもない。ビッガーの社会意識を最も複雑にしているのは彼が二つの世界——強力なアメリカと彼が置かれている、進歩発展を妨げられた人生生活——との間を無用の長物としてさまよっている、という事実である。だから私は、読者にこの無人地帯 (No Man's Land) を感じ取ってもらおうと、この小説を書く仕事を手掛けたのだ。」¹⁴⁾

ライトが、何故、ビッグーの白人憎悪がもたらした、彼の「位置」を民族主義の範疇に入れたのか、理解に苦しむ。

ビッグーの社会意識の第一に挙げられる「白人に対する非常に激しい憎悪」は「黒人の排外主義」(Black Chauvinism)に伴って現われるもので、黒人民族主義とは何の係わりもないものである。

ライト自身、民族主義の「事情に通じて」おり、彼は、よく知られた彼の創作理論『黒人作家の青写真』(1937)において、多くの白人が民族主義と排外主義とを混同し、黒人感情をたたえる表現を白人を排外する作品と誤解する傾向にある点を指摘し、両者を区分している¹⁵⁾。

ビッグーを漠然とした意味でも、「黒人の排外主義者」と規定できないのは、それによって、結果的に白人を排外することになるような、黒人第一主義的なところ、つまり黒人集団と黒人文化を尊重し、これを称讃するところが見られないからだろうか。その点について言えば、漠然とした意味でも「黒人民族主義者」とは言えない筈である。

ライトは黒人民族主義に、たいした関心がないのだろうか。彼は黒人文化面の評価においてすら、民族主義者的なところは見られない。人間性の暖かさに富む黒人文化を、その自伝『ブラック・ボーイ』(1945)の随所に表現しながら、彼は黒人文化を否定的にしか評価しない¹⁶⁾。

彼は恐らく黒人民族主義の人種分離的な側面をとらえて、ビッグーが「はねつけられた」、即ち、白人社会に突き離された面と重ねて、「民族主義」の範疇に持ち込んだらしい、と言う外ない。ライトはガーヴェイ主義者の考えなど信用しない、と一蹴してはいるが、分離国家建設を求めてやまぬ、そのダイナミックな情熱に感嘆し、そこに、黒人の秘めた力を垣間見ている¹⁷⁾。

ビッグーは白人社会と一定の距離を置いた。その意味で民族主義的である、ということなのかも知れない。

では、「彼が置かれている、進歩発展を妨げられた人生生活」の場、彼が住んでいる「外された社会」即ち、黒人社会との関係を見ると、彼はこれと

も一定の距離を置いている。これは「ビッグーは黒人の宗教や民衆文化を必要とする程の民族主義者でもない」から黒人社会に密着していないと見れば説明はつく。

ビッグーは白人社会と黒人社会のいずれにも入れずに、その中間に存在する。ライトが No Man's Land（無人地帯）という戦場用語を使っているのは、白・黒両社会を敵対する陣営に見立ててのことだろう。ビッグーはその無人地帯にいるわけだが、そこへ彼を追いやったのは、「白人に対する非常に激しい憎悪」である、とライトは説明する。これは、白人社会と心の距離を作る説明にはなるが、黒人社会と心の距離を作る説明にはならない。

ライトが言う、ビッグーの社会意識のもう一つの面、「アメリカ人」つまり、「アメリカ市民」の面を探れば説明し得るものがあるだろうか。

「一般のアメリカ人は口にはしないが、それを当然の事と見なしている部分が彼のうちにある。……私達は合衆国憲法は政治行政が依拠する上で、公正な文書であり、権利宣言は市民的自由を保護するすぐれた法的、人間的原理であり、いずれの男女も自己をはっきりと理解し、自己の天命と目標、自己固有の、避けがたい運命を追求する機会を持つべきである、と信じるどころの理想主義のもとに暮らしている。……ビッグーは時代の知的、情的風潮の中で、……感情的に、直観的にそれを知っている。」¹⁸⁾

これにはビッグーを黒人社会から離反させるものは見つからない。「外された社会」では、この理想主義は実現できないから、その社会に距離を置く、というのでは説明にならない。この理想主義は、人を無人地帯に追いやるところか、黒人社会のために、白人社会に対して積極的に働きかける精神的支えとなるものである。

結局、ビッグーをして黒人社会との間に一定の距離を置かしめるものも「白人に対する非常に激しい憎悪」の中に隠されていると見る外ない。では、

その説明をどう行なえばいいのか。

ここで文A（文A'）を再考すると、そこに手がかりが見出せる。

ビッガーは白人社会に「はねつけられて」、憤慨し、「白人に対する非常に強い憎悪」を抱いているが、白人社会に対して、「強く心を引きつけられた」状態はそのまま持続している、と判断されるからだ。彼と黒人社会との間に存在する距離は、彼に及ぶ白人社会の牽引力と見ることができる。

白人社会の牽引力とは、白人社会が彼に及ぼす文化の影響力であって、これがビッガーの、また人種関係におけるライトのものの見方、感じ方を決定的なものにしている。

もともと、ライトの伝記の第二部として、1944年に書かれたが、出版されず、彼の没後十数年を経て出された『アメリカの飢え』（1977）で、黒人が白人文化を吸収する結果、黒人が陥る自己憎悪のカラクリを彼は次のように説明している。

「白人達に憎み、嫌われ、さらに黒人を憎み、嫌う文化の有機的な部分となっているので、黒人は白人達が黒人の本性と見なして、憎み嫌うところのものを黒人の方でも憎み、嫌うようになる。しかし、自尊心があるから、黒人も自己憎悪の念を隠すことになろう。黒人はすっかり、白人の支配を受けているので、その生活全体が、白人がどんな態度をとるかによって左右されていることを白人には知ってもらいたくないのだ。しかし、自己憎悪の念を隠しているときに、胸中にある自己憎悪の念を誘発する者は憎まずにはいられないのだ。」¹⁹⁾

ビッガーは白人文化の中の黒人を差別し、抑圧し、また憎み、嫌う部分をも、そのまま受け入れた。その上で、まさに、この黒人を差別し、抑圧し、また憎み、嫌う部分にはねつけられたのだ。そして、彼ははねつけられても、白人文化にとりつかれたままである。彼は自分を黒人の目で見ることが、そ

れだけではない。彼は白人文化の、彼が黒人である故に彼をはねつけた部分で、自分を、また他の黒人を見ている。

黒人社会はビッガーにとっては、彼がその一構成員であるが故に、白人社会が拒絶する基になった社会なのだ。この黒人社会及び黒人に対しても、彼は——『ビッガー』では見せないが、『息子』であらわにする——非常に激しい憎悪の念をいだいている、と言える。彼には白人文化の中の、黒人を憎み、嫌う文化の部分が働くからだ。

彼が置く、黒人社会との距離は彼を「はねつけた」「白人に対する非常に激しい憎悪」の裏面には、彼を「はねつけ」させた黒人に対する非常に激しい憎悪が存在する、と見ることができる。

彼は白人社会と黒人社会のいずれにも、帰属することができないまま、要らない人として、両者の間にある無人地帯をさまよっているのだ。

ライトがビッガーを「漠然とした意味で、黒人民族主義者なのである。」と規定したが、これは、白人社会と黒人社会との間にある無人地帯をさまよう黒人である、と言った方が分かり易いし、黒人民族主義に対する誤解やあなどりを避けることができよう。

さて、文 B'、文 B^o、及び文 B[#]の、波線部を「白人社会と黒人社会との間にある無人地帯をさまよっている黒人」と書き替えると、該当する三つの文の、共通する部分は

文 C 「彼はアメリカ合衆国生まれの息子だから、アメリカ市民である。

しかし、また同時に、彼は、白人社会と黒人社会との間にある無人地帯をさまよっている黒人なのである。」

ということになる。これに続く部分を別に立てると、

文C「と言うのは、彼が黒人であるがために、アメリカ白人として生きることを許されないからだ。」

文C'「と言うのは、彼が黒人であるがために、アメリカ白人と一緒に生活させてくれないからだ。」

文C#「と言うのは、彼が黒人であるがために、アメリカ市民として、白人と平等な生活をさせてくれないからだ。」

この三つのうち、どれがビッガーの欲望、望み、願望を探り出す上で適切か、検討しよう。

文C'は、注意を要する。それは、ヒューズが指摘した、黒人の白人願望の面とこれを支える強い要因の一つである、混血黒人（実質は混血白人であるが、社会的定義によって前者で呼ばれる）の存在をも考慮して検討する必要があるからだ。

文C'を読むと、黒人が白人として生きる、という文意が、はたして成り立つか、という疑問が生ずるかも知れない。しかし、黒人奴隷制度がかつて存在し、そこで人種混交が生じたこと、混血した人達との間で、またこの人達と白人あるいは黒人との間に、子孫が生じることを考えると、混血した人達の

「身体的諸特徴は、白人と区別のつかない人と黒人と区別のつかない人とを両端に置いて、その間に、多種多様に現われる。」²⁰⁾

ことが分かる。

ライトの祖母は、どの白人と比べても、ひけを取らないくらい白く、幼少の頃の彼の質問に対して、祖母の先祖はアイルランド人、スコットランド人、フランス人の家系の出で、その間のどこかで、黒人との交わりがあった、と彼の母が語っている²¹⁾。

かつて黒人奴隷制度を長期に渡って維持し、その後、人種隔離制度の下に、人種間結婚を禁止した、人種抑圧、差別の歴史を持つ社会では、黒人と白人とを分け隔てる傾向が強く、白人集団は、黒人との混血者をそのメンバーから除外する。従って、アメリカ社会では、黒人の祖先を持つ人は、身体特徴が白人と変わらない人でも、黒人と規定され、そのように処遇される。しかし、このような、人種を分け隔てる考えを打ち破る人々も存在するし、白人として通り、また通す人も、そうしない人もいる。

身体特徴の多様性に富む集団では、また身内の者や親族、知人や隣人に、白人とそう変わらぬ「黒」人のいる人達の間では、ヒューズが指摘するような、白人でありたい、という思いが、人によっては願望ではなく、意欲次第である場合もある²²⁾。それを考えると黒人の中でも黒い人とあまり黒くない人とがあり、黒人民族意識の強弱によって、黒さの象徴的な意味が変動する。

さて文C'の「黒人であるがために」は「とても黒くて」という意味になり、続く文は「アメリカでは白人として通らない。」という文意になる。要するに、そこには、実現不可能な、白人願望が存在することになる。無人地帯をさまよう心的要件の一つになるのではあるまいか。

文C'では「白人と一緒に」生活する、という場合、人種関係の現実に注目する必要がある。アメリカ社会の居住地は人種分離しており、特に黒人と白人の間では差別の介在によって、それが顕著である。住宅及びその設備、周囲の施設、環境は、白人地域の方が際だってよく、費用も割安である。そこから、職場やショッピング・センターに通じる道路、交通の便も同様である。消費生活の面だけでも、無駄が少ない。

黒人が「白人と一緒に」生活することができれば、つまり、白人が黒人と一緒に生活するようになれば、アメリカの人種問題は解決したも同然なのである。従って、これは、達成目標であって、大きく言えば人種統合の目標で

ある。

「白人と一緒に」生活するとは、一つはそこにある、便利で、無駄が少なく、快適な生活を黒人の方でも実現するという事、言い換えれば、

(a) 白人と同じレベルの生活を実現すること。

もう一つは白人と身近に暮らし、接して、意思の疎通を持つこと、つまり、人種関係でなく、

(b) 人間関係を持つことである。

この二つを実現するには白人居住地に住むのが早道である。その試みに対して、白人がどんな反応をするか、過去の歴史が示している。今日の居住地の人種分離状態にその結果が見られる。黒人が来るのを阻止するか、白人が去るかだ。

ライトは『息子』で、黒人が黒人だけ、一地域に閉じ込められ、住宅と住居差別を被っている実態の一部と黒人ゲットーを作り出す白人不動産業界のメカニズムの概略を提示している。

国と北部産業が必要とする労働力として、黒人の北部大都市への移住が続き、そこで住宅不足が生じると、白人不動産業界が、老朽化した住宅区域を黒人専用指定し、不良住宅に高い家賃で、貧しい黒人達を押し込め、利益をむさぼる。

黒人が政府機関や白人企業で得た収入は、その地区に進出した白人商店で割高の品を買わされて白人社会に吸い取られ、黒人の街に金は残らず、沈滞する。

これを阻止して、街をよみがえらそう、と黒人企業家が黒人運動と提携して苦闘している²³⁾。

それは、白人がその居住地域に、黒人を入れない以上、黒人居住地域を、黒人の力を合わせて、改善し、発展させ、便利で、無駄の少ない、快適な生活をしようとする黒人の強い意思の表われである。

白人と共に暮らして、人間関係を持つことは先送りとなるか、その必要性

を認めないか、のいずれかである。

ビッガーはこの黒人居住区に閉じ込められ、自分の置かれた現実に向けないよう、精一杯努めているだけである。映画を見て、そこから白人社会を知る。友人との白人ごっこの遊びで、空しく、白人社会を偽装体験する。文C'の(b)の面がビッガーに適當する、と考えられる。

文C#は、ビッガーの社会意識の第二の面が第一の面をしのぐ場合にのみ適當する。合衆国憲法と権利宣言の原理を尊重するアメリカ市民は人種意識を克服し、他人種集団メンバーの公民権を尊重する傾向にある。

人種意識よりも市民意識の強い黒人は、人種の相違をこえて、人間が平等であるという原理のもとに、権利を主張し、その実現を求めて行動する、人種意識よりも市民意識の強い白人はこれに応えるであろう、と想定して。これは黒人解放運動の中の人種統合派の特徴であり、分離派は、白人に、この原理を期待することは間違いである、という見解のもとに、黒人の自力更生によって、白人から独立・分離する道を求める。

この文はビッガーには適當しないように思われる。

さて、ビッガーの特徴とその構築過程で、ビッガーの「憎悪」の面を主に見てきた。しかし、彼には、ライトも共有している、という心的特徴——ライトはビッガーの「憎悪」とは、感情を同じくしない、——「恐怖」と「恥辱」がある。特に「恥辱」に関しては『ビッガー』においては、「憎悪」や「怒り」、「恐怖」とは同じ比重では扱われてはいない。それは、人種関係が生む社会的類型に比重の置かれた『ビッガー』においてでなく、人種関係の中に置かれた『息子』、人間ビッガーにおいて明かされるものだから。

では、検討を加えた三つの文のうち、文C'と文C'の(b)を大枠にして、文C#を除くことに無理がないか、気を配りながら、『息子』のビッガーを検討しよう。

〔注〕

- 1) Richard Wright, How “Bigger” was born, *Native Son* (A Perennial Classic, 1966), p. xi.
- 2) *Ibid.*, p. xii.
- 3) *Ibid.*, p. xv.
- 4) *Ibid.*, p. 364.
- 5) *Ibid.*, pp. xxi, xxii.
- 6) *Ibid.*, pp. viii, ix, x, xi.
- 7) *Ibid.*, p. xi.
- 8) *Ibid.*, p. xiii.
- 9) *Ibid.*, p. ix.
- 10) *Ibid.*, p. xx.
- 11) *Ibid.*, p. xxiv.
- 12) *Ibid.*, p. xxiv.
- 13) Langston Hughes, The Negro Artist and the Racial Mountain, Addison Gayle, Jr. ed., *The Black Aesthetic* (Doubleday & Company, Inc., 1971), p. 175.
- 14) Richard Wright, *op. cit.*, p. xxiv.
- 15) 彼は『黒人作家の青写真』（1937）の第五節「黒人創作における黒人民族主義の基盤と意義」において、黒人集団の感情・行動の自制（self-possession）、相互依存意識、集団感情の表れである「黒人民族主義」を目のあたりにして多くの白人は当惑し、これを「黒人の排外主義」だと悔やむ傾向があるのを指摘している。彼は、黒人民族主義の範囲を乗越える作品を書くにはこれを、その起源と限界を知らなければならない。それには、先ず、これを自己のものとし、理解すべきだ、と述べている。

Richard Wright, *Blueprint for Negro Righting*, Addison Gayle, Jr. ed., *The Black Aesthetic* (Doubleday & Company, Inc., 1971), p. 338.

- 16) Richard Wright, *Black Boy* (Signet Book, 1964), p. 45.
「黒人の生活が文化的には不毛に等しいことを考えると、潔癖で、本気の優しさや、愛とか、名誉とか、忠誠心、記憶力などは人間本来のものなのか疑わしく思われる。」彼は黒人にそんなものは備わっていない、と思っているようだ。
- 17) Richard Wright, *American Hunger* (Perennial Library, 1979), pp. 28, 29.
- 18) Richard Wright, How “Bigger” was Born, *Native Son* (A Perennial Classic, 1966), pp. xxiv, xxv.
- 19) *American Hunger*, p. 6.
- 20) 拙論「ネラ・ラーセンの『バシング』」（Ⅰ）、岐阜経済大学論集、第22巻第4号

(1989年), 2頁。

21) *Black Boy*, pp. 31, 56.

22) アメリカ社会では、その関係がどれ程遠くても黒人と血縁関係にある人を黒人と規定する。そこで、白人と区別がつかない人が黒人である、という理不尽な判断が生じる。そして、これに対して様々な対応が生じ、人種関係社会学、またアメリカ文学においてもテーマになる。黒人文学作品の代表的なものに、ネラ・ラーセンの『バシング』があり、拙論「ネラ・ラーセンの『バシング』」(前掲)で、社会学の面からも検討を加えた。

23) St. Clair Drake and Horace R. Cayton, Chapter 16, *Negro Business: Myth and Fact*, *Black Metropolis*, (II) (Harper Torchbooks, 1962).

2 ビッガー・トーマス

a. メアリー・ドルトンの死まで

ビッガー・トーマスはシカゴ市のサウス・サイドの黒人ゲットーで極貧の生活の中にいる。

同じ貧困の中において、彼の母親は内職に洗濯物を山と引き受け、仕事に励んで三人の子供を養う。妹ヴェラはYWCAに通って裁縫を習い、母親の助けになろうと励む。

だが、二十歳のビッガーは働こうとはしない。

なぜ、働こうとしないのか。それは、彼がビッガーだから。つまり、彼は、「進歩発展を妨げられた生活」と「強力な社会」、黒人社会と白人社会との間に彼が設けた無人地帯に身を置いているからだ。

彼は極貧に苦しむ身内の者達を、働いて助けようとする気は起こさないようにしていた。彼等に係わると、二つの事実直面する。先ず、自分が無力であるという事実。ついで、身内の者達の生活が、惨めで、恥ずかしいものであるという事実。この事実直面すると、恐ろしくなり、絶望して、われを失う、つまり、精神異常をきたすかも知れないからだ。

「彼は家族の者達が苦しんでいるのに、彼には助ける力がないのが分かっていたから彼等を憎んだ。彼等の暮らしぶり、その生活ぶりの恥ずかしさと惨めさをそのまますっかり感じ取ったら、その瞬間、恐怖と絶望でわれを失うような気がした。それで彼は家族の者には、がんとして係わらぬ態度でいた。彼は一緒には暮らしていたが、壁を、カーテンを隔てて暮らした。」¹⁾

ビッグーの家庭は母子家庭で、その上貧しいから、生活保護費の支給を受けている。彼は、そこにおいて、胃袋に食べ物をいれ、眠るには事欠かないが、これでは小遣い銭に不足する。だが、その分は手に入る。

彼は仲間と組んで、他の貧しい黒人達を襲って、金品を奪い取る。白人文化の黒人を憎み、嫌う部分まで黒人は吸収している、というライトの説明をIで紹介したが、黒人を襲うもう一つの説明が、ここでなされる。

「彼等はいつも黒人達から物を奪った。その方がずっと容易で安全だと思ったからだ。と言うのも、白人警官は黒人が黒人に対して犯す犯罪など、実際、本気になって捜査したりしないのを知っていたから。」²⁾

警察行政の人種差別とその責任を問う声は、今日でも聞くが、すべてがそこにあるわけではあるまい。

白人の商店で強盗を働く計画を立てるが、彼等はこれは恐ろしく、なかなか実行できないでいる。白人に対する黒人の犯罪に、白人社会がどう対応するか、彼等は分かっているからだ³⁾。

しかし、彼等の中で、ビッグーが一番怯えている点に注意したい。それは他の仲間が、黒人には極めて手厳しい警察を恐れるのに対して、ビッグーの場合、「強く心を引き付けられ」「はねつけられ」て、その愛憎の念を隠すべ

く、無人地帯に身を潜めることになった、「強力な社会」の一部分に触れることをも意味するからだ。それは白人社会の報復力に対する純然たる恐怖の外に、自己憎悪を呼び起こす。

彼が仲間に加えた凄惨な暴力は、自己憎悪、つまり黒人憎悪の念が噴出した、と言える。

ビッガーは仕事につかないと、家族の生活保護費をカットすると、福祉事務所に脅かされて、働くより刑務所の方がいいのだが、と言いつつ、彼は不動産業界の富豪ドルトン家の運転手になる。

黒人差別によって、働きたくても黒人にはその口が少ない。ビッガーもビッガー No.1~No.5（以後ビッガー・タイプ）も、仕事口があっても働かない。働くのは、ライトによれば、ビッガーの変種型である。

ビッガーとビッガー・タイプには白人に対する、特有の恐怖心がある。それは、当時の南部では、人種隔離制度とこれを支える、人種主義的生活習慣に抵触したり、これを破ったりするだけの、反逆心があるのはライトによれば、ビッガー・タイプだけであるから、それに対する白人社会の、冷酷無比の報復を彼等はよく知っているからだ。ビッガー・タイプの変種型も、誤解されたり、疑われたり、黒人の身の程をわきまえてない、と判断されると制裁の対象となる⁴⁾から、法的保護に頼れなかった。南部の黒人達は白人集団メンバーに対する恐怖が根強かったことが推測できる。

恐怖感を鎮めるために、ピストルを懐にドルトン邸宅に足を踏み入れるが、この白人の現実の世界は、予想とは異なっている。ここに住込みで働き、夜学に通い、官職についたグリーンという黒人の青年がいたことを知る。アイルランド出身のメイドが、対等に接する。ドルトン夫妻も彼の力になろうとしている。立派な個室を与えられたビッガーが楽しくなり、ガールフレンドのベッシーをそこへ連れてこよう、と思ったほど、くつろぎを感じた。彼が担当する大掛かりな暖房炉の自動装置に感心し、運転する新車ビ

ューイックを見て、愉快になり、嬉しくなる。

彼もここで、長く働いて、教育を身につけ、グリーンと同じように、安定した職につく道をたどるのか。

彼の心を強く引き付けた上で、彼をはねつけた白人社会の玄関口から、彼はまず中へ入ったのだ。彼には安心できない世界だったから、ナイフとピストルを持って入ったのだが、「強力な社会」の有力な家族が、好意を持って彼を抱き込もうとしている。

無人地帯からビッグーは、黒人、白人いずれかの世界に、出られるのだろうか。

雇われたその日の夕方、ドルトン夫妻の一人娘、メアリーを出先に送る最初の仕事で、そのためにドルトン氏が雇い、ビッグーもそれを引き受けた仕事の最後であった。

ライトは黒人青年と若い白人女性とが一台の車に乗る、という場を設定して、この種の一組に対する、白人社会の反応をビッグーの緊張感と苛立ちに反映させて、異人種間の男女関係を制約する、アメリカ社会の人種主義的性観念の執拗さを提示する。

これは黒人男性を白人女性に対する潜在的暴行魔とする偏見と、黒人男性と親しくする白人女性を白人集団を辱める性的異常者と見なす偏見に関するもので、ライトは前者を取り上げている。

『息子』は、初版が3時間で売り切れ、6週間に25万部売れた⁵⁾が、その原因の一つに、ビッグーとメアリーの関係に関心が向けられ、

「殺人モノはどんな話でも興奮するが、黒人の男が白人の女の子を殺せば、大抵の人には、控え目に言っても、煽情的だ。」⁶⁾

と、この面を評された程である。

メアリーを連れて戻ったビッグは、酔った彼女を助けて寝室まで送り、近づく人の気配に、恐怖し、誤解を避けんと極度に緊張して、彼女の口を押さえ、窒息させてしまう。

『ビッグ』で抽象的に論じられた、ビッグの無人地帯が、彼はメアリーが乗った乗用車の中で、白人社会との関係面で、具体的な形と様相を見せる。

彼はドルトン家に入って、腰掛けてドルトン氏と、台所の食卓でメイドのベギーと話合う。前者は面接、後者は夕食を取りながら仕事の指示を受け、職場であるこの家の様子を教えられたもので、人との関係はくつろいだものであっても、ビジネス形式を踏まえている。彼は個室を与えられるが、その位置に関して言えば、この邸宅に住む人間の地位と役割に基づいて、配置されている。だから、白人の家の中にも、それが直接、ビッグの無人地帯を脅かすことはない。

乗用車も、運転手と雇用主の家族との関係と位置が定まっているから、たとえ空間距離が縮小されて、それを心理的に押し広げんとして、気が張りつめることがあるにしても、役割関係による位置と距離は存在している。

ビッグは運転手として前席のハンドルの前に、メアリーは女主人として後席に、前後に隔たって乗車している。彼はバック・ミラーに映る彼女と会話しながら、この女性が、人間として、対等に彼に接していることに気がつくが、白人、特にその女性と人間関係を持った体験がないので、それをどう判断していいか不明なので、何かの策略だろうか、と警戒する。白人女性に関わって、制裁を加えられる黒人男性の話は、それだけでも、恐怖と憎しみを生む。すると、人種関係が頭を擡げる。

一度、白人社会の方に向かって、無人地帯から出かかったビッグは、またもとに戻る。彼女が指示する通り、車を止めると、彼女はボーイフレンドを連れてくる。彼が差し延べる白い手に、ビッグが手を延ばしても、途中

で動かなくなる。黒い手だから。

自己紹介して、自己を友人と規定したジャン・アロンは、友人として認識したビッグー・トーマスに、友人の手、つまり、人種でなくて、人間の手を差し出している。彼もメアリーも社会運動にたずさわり、黒人問題に強い関心があるから、黒人の人種面と人間面の双方を理解したつもりで、積極的に行動してくる。

ビッグーは白人との接触があっても、人間面での関係は皆無で、人種面と社会的役割面での関係、例えば、白人の社会福祉委員、白人の警察官、白人の店員との関係でしか接していない。それも一方が、人種的にも、社会的にも立場が強い。現にドルトン家の人々と彼の関係がそうなのだ。だから、彼は、対応が困難で、弱り切ってしまう。そのビッグーの手をジャンの手がぎゅっと握る。

ビッグーは黒い肌を強く意識させられて、

「その瞬間、彼は肉体的にはまったく存在していないような気がした。彼は自分が、何か自分で憎んでいるもの、それが自分の黒い皮膚につけられているのを、自分でもよく知っているが、恥というバッジのようであった。それは影のような領域、白い世界と自分の存在している黒い世界とを隔てている無人地帯であった。彼は何にも覆うものがない、透明な存在であるような感じがした。」⁷⁾

ビッグーは無人地帯にさっと身を引いたのだが、衝撃の強さに、彼自身が無人地帯と化してしまったように感じている。

彼が無人地帯から、白人世界の方へ、引かれる状態とまたもとへ戻る状態に注目すると、前者は白人の側から働く、人間としての行為に対して、彼の側も人間としての反応をもって行為し、相互に人間関係が形成されようとする状態、後者は白人の側から働く、人間としてでなく、あるいは人間として

よりもむしろ、白人種としての行為に対して、彼の側も人間としてでなく、あるいは人間としてよりもむしろ、黒人種としての反応をもって行為し、相互に人種関係が形成されようとする状態と考えられる。

ビッガーは白人、黒人と接する時、この無人地帯の中間に身を置いているようだ。

複雑なのは、黒人世界の方へ出る状態と、またもとに戻る状態である。これは、後に述べる。

さて、ビッガーを、柔らかい無人地帯、あるいは柔らかい透明体でなく、固い、あるいは硬直したそれにする出来事が生じる。

ジャンが自分が運転するよ、と言って、運転席側のドアを開けて、乗り込んでくる。ビッガーは雇主の車に雇主の娘、つまり若い女主人を乗せている。その男友達が、彼女の暗黙の了解を得て、そうするのだから、ビッガーは応じる以外にない。

ビッガーが他方のドア側へ移動しかけると、そのドアを開けてメアリーが乗り込んできて、彼は二人に挟まれた状態になる。

この二人は彼を「人間」として、親密な間柄にするのだが、ビッガーは無人地帯の真ん中に、硬直状態になっていて、この二人の間から放たれるのを待つ外ない。

黒人街のカフェで、ビールを飲み、ラム酒を口にしてビッガーの緊張がほぐれる。ラム酒を回し飲みしながら、深夜の公園をドライブし、後部の席で男女二人が酔いしれるのを眺め、彼自身が宙に浮くほど酔ってしまうと、それと気付かぬ間に、人種の相違も社会的地位も役割もその機能を停止して、車の中の三人は同じ人間になってしまっている。

さてここで、当時の南部で、ほとんどの施設が人種隔離されていたが、その中でも、身体を休め、うるおいを得る場所の人種隔離に注意を払う必要がある。

信仰の場の隔離と飲食する場の隔離を比べてみると、信仰の席の隔離よりも、飲食の席の隔離の方が、人間の共感と人間平等の感覚を鈍化させる上で効力を持つという点である。

同じ噴水の水を飲んで、渇きをいやし、同じ場所に腰をおろして、涼風にしばしくつろげば、白人も黒人も、共通のくつろぎを味わう。席を共にして食べ物の味に感嘆したり、酸味、辛味に顔をしかめ合うと、自然に気持ちが通じ合う。そうすれば、打ち解けて、言葉を交わすことになろう。

「二つの集団間の社会的不平等を、歴史的に象徴する主たるものは、両者が食事を共にすることに対する禁忌である。……一般的に言って、アメリカでは食事をすることには、あまり社会的意味はない。……白人だけの場合、南部では北部に比べて、食事をすることには、それほど重要な意味は見られない。しかし、人種関係においては、共に食事をするという行為は、社会的に、極めて重要な意味を生ぜしめる。……社会的儀式が極めて薄いと言われるものの、アメリカの食事にも、多少たりとも、平等主義的活動という意義は存在している。即ち、食事することで、人は生物学的欲求に対して、共通の感受性を顕示することを余儀なくされる。だから、半時間余り、顔を合わせて座っていると、必然的に打ち解けた話をするようになる。」⁸⁾

人間は生物学的欲求とその充足において、人間としての等質性、平等性が必然的に実感され、共通の感覚を分かち合う。

この効用を社会的行為の分野で考えれば、同一集団以外の人々が、打ち解け合う上で、最も日常的で、効果的な、社会的、生物学的行為は、彼等が共に席について飲食することである。

当時、社会的にも、法的にも人種を分け隔てした南部において、人々が共

に席について飲食するところ、レストランやランチカウンター、酒場で人種隔離が行なわれた、主たる理由が明らかになろう。(つづく)

〔注〕

- 1) Richard Wright, *Native Son* (Perennial Classic, 1966), pp. 13, 14.
- 2) *Ibid.*, p. 17.
- 3) *Ibid.*, p. 18.
- 4) Ida B. Wells-Barnett, *Mob Rule in New Orleans*, pp. 46, 47. William Loren Katz ed., *On Lynchings* (Arno Press and New York Times, 1969).
記録されただけの数だが、1882年から1899年までの17年間にさまざまな理由で、婦女暴行、盗み、態度横柄、など、そのほとんどが根拠のない言い掛かりによるものだが、2480人の黒人が凄惨なリンチ殺害の犠牲になっている。手足を切断されたり、半死半生の目にあう者はたくさんいた。リンチ殺害は黒人を戦慄させ、白人に対する恐怖心をうえつけて、白人体制に屈従させるのが目的であったから、数そのものもさることながら、それが持つ意味を考慮する必要がある。
- 5) John M. Reily ed., *Richard Wright, The Critical Reception* (Burt Franklin & Co., Inc., 1978), p. 95.
- 6) Howard Mumford Jones, "Uneven Effect", *Boston Evening Transcript*, March 2, 1940, book section, John M. Reily ed., *Richard Wright*, p. 46.
- 7) *Native Son*, pp. 47, 48.
- 8) Gunnar Myrdal, Chapter 29, *Social Segregation and Discrimination American Dilemma*, Vol. II (Pantheon Books, 1972), pp. 608, 609.